005 Cacco

この間電車に乗っていたらドアが閉まる寸前に乗り込んできた男性と目が合って、その人は２０年くらい会ったことのなかったＫ君だった（厳密にはＴＩＣＡさんの中学時代の仲良し同級生。で、健さんの姪っ子さんと一時期結婚していたという縁を持つ)。「いつもはこの車両に乗らないんだよ」「あたしも普通は年だから座ってるんだよ」と偶然をたった一駅間だけれど喜びあった。別にそれだけの話でそれから何が始まったわけではないけれど、「会う」とか「会わない」とかは細かな枝葉に分かれていて、こんなふうに会うことはとっても低い確率でしか起こらないようだ。会うべき人には会うように人生できているとも言うけれど、微妙にすれ違った人たちの中に会うべき人がいたのではないか、そんなふうに考えてしまうのは今現在マイナス思考にはまっているからかもしれないなぁ。

作品名	作家名	感想	評価
インストール	綿矢りさ	作者１７才のときの作品。登校拒否の女子高生と小学生がコンビを組んで風俗チャットで一儲け。今風な設定で軽くて読みやすい。一時間で読めちゃいます。ふたりの愛読書は「ばがぼんど」だった。平井堅も聴くみたい。ミスチルじゃないのが残念。作者の新作は「夢を与える」ってアイドルの女の子の話らしい。この人目の付け所がいいなぁ。読んでみたいって気にさせられるもの。	☆☆☆
東京奇譚集	村上春樹 新潮社	不思議話を集めた短編集。「僕」の友達の体験談を綴る「偶然の旅人」が心に残る。村上春樹である「僕」はオカルトの類を信じているわけではないが、変わった経験をいくつかしていて、その中の取るにたりないような（自分でそう表現している）偶然のふたつの出来事を紹介している。そのひとつは、アメリカのある町のレコード店で前から探していた古いレコードを見つけ、奇跡的な出来事に感激しながら店を出るとき、すれ違った男性にふいに時間を聞かれる。かれは時計を見て答える。「４時２０分だよ」答えて彼はふと気付く。あれ、これはこのレコードのタイトルじゃないか！なんて素敵な偶然！ところでこのレコードはジャズの名盤らしいがわたしはミスチル以外の音楽をなにも知らないのでタイトル間違ってると思う。きっとトミーさんなら知ってると思う。恥ずかしい(-_-;) で、春樹さんは確か取材で訪れたノモンハンのホテルでポルターガイスト経験をしていたと思う。すごく恐いけどうらやましい、でもやっぱり恐い。	☆☆☆☆★

薬指の標本	小川洋子 新潮文庫	韓国映画「弓」を観ようと思ってついでにたくさん入っている予告編まで丁寧に観ていたら、ちょっと面白そうな予告編が。それはフランス映画なんだけれど原作は日本人作家小川洋子さんなんだそうな。ストーリーに惹かれて地元の本屋さんで原作本を即買ってきた。３６０円だったから^_^;サイダー工場に勤めていた女性は、ある日事故で薬指の先っぽを失う。それを契機に田舎から街に出てきた彼女はある日、古びたマンションの入り口に貼ってある求人広告を見つける。「事務員求む。標本作成のお手伝いをしてくれる方」。このうらぶれた標本室の役割は、村上春樹作品「ネジクロ」の裁縫室に通じるようだ。物語の前半は春樹作品を思い出す。 もうひとつの収録作品は「六角形の小部屋」。主役の女性とミドリさんというおばあさんとの出会い部分が好きだなぁ。人と人ってこんなふうな出会い方をあまりしない。だからこそ「六角形の小部屋」に辿り着けるってことなのかなぁ。	☆☆☆☆★
密やかな結晶	小川洋子 講談社	「わたし」の住む島は「記憶狩り」が行われ、住民達は心の中のものをひとつずつ順番に失くしていく。小説家であった「わたし」はある朝目覚めると「小説」がなくなっていることに気付く。無国籍ファンタジーという呼び方でいいだろうか。どうしても外国のお話のようだ。よく覚えてないけれど、Ｐ・オースターの「最後のものたちの国で」はこんな話じゃなかったか？「わたし」は記憶を失くさないでいられる異端者「Ｒ氏」を秘密の小部屋にかくまうが、その協力者の「おじいさん」がとってもいい。同居犬のドンもかわいい。「柴王」みたいなの。	☆☆☆☆★ 「柴王」というのは布浦翼さんの漫画に出てくる放浪の柴犬の名前。すっごくかわいいんだな！
寡黙な死骸 みだらな弔い	小川洋子 中公文庫	この人の本が気に入ってしまったようで古本屋さんで買ったり、図書館で借りたりして夢中で読んでいる。「博士の愛した数式」がベストセラーになったが、「博士」は数式が作り出すロマンが素晴らしかった。こちらの方はもう少し暗くせつなくもの悲しい。短編連作。表題を冠した作品はない。全てに「死」や「弔い」が係わってくるということか。	☆☆☆☆★

まぶた	小川洋子 新潮文庫	ますます気に入ってしまって今度はわざわざ車でブックオフまで行ってたくさん買い込んできた。こんなにひとりの作家を続けて読むのは１０年前に春樹さんに出会って以来だ。この人の本に出てくる人物達には名前がない。そこにいるのは「わたし」であり「僕」であり「おじいさん」「おばあさん」であり「犬」であり「Ｒ氏」である。と、書いてきて気が付いたけれど「薬指の標本」の先生は弟子丸という。「密やかな結晶」の犬はドンという。なんだ、ちゃんとあるじゃん。わたしがすっかり忘れているだけ？ところで村上春樹の登場人物たちは「オカダトオル」とかどうでもいい（ごめんなさい）名前が多い。「特徴がない」を意図して付けられたのだろうと思う。「ネジクロ」の「加納マルタ、クレタ」姉妹の名は印象的だけれど確かこの名前は本名じゃなかった。それにしても、すごい名前だな～好きだな～	☆☆☆☆
アンジェリーナ	小川洋子 角川文庫	「佐野元春と１０の短編」という副題の通り、佐野元春ファンである作家が歌に触発されて書いた１０の短編集。こんなふうに好きな人の歌を自分の感性で形にする作業はどんなに楽しいものかと思うが、そこには歌とはまったく違う（きっと何かは同じなんだろうけど）作家独自の世界が広がっている。ただ他の作品よりほろ酸っぱい、ほろ甘い感じが強いか。中で「ナポレオンフィッシュと泳ぐ日」が好きだ。なぜ彼女は次の年にホテルに行かなかったんだろう？江國香織さんのあとがきもとてもいい。	☆☆☆☆
妊娠カレンダー	小川洋子 文春文庫	芥川賞受賞作。 「妊娠カレンダー」 父母を亡くした姉妹は姉の旦那と三人で暮らしている。ある日姉が妊娠し、臭いに異常に敏感になる。ときに妹は庭に炊飯器を持ち出し地面にござを敷いてひとりで庭で食事する。そして夜空を見ながら、ひとりの食事は心が安らかになるとつぶやく。題名で感じるイメージとはかけ離れたお話。 「ドミトリー」 １５年ぶりに電話をくれたいとこは、「わたし」が学	☆☆☆☆★

		生時代に住んでいた古い学生寮に住むことになる。物語の中盤で明かされる「先生」と呼ばれる寮の管理人兼経営者の秘密には驚いた！後半はホラーじみて恐かった。ホラーな香りは「薬指の標本」にも共通する。先生はなぜああなったのか、いとこは、もう一人の学生はどうなったのか？なにも明かされないのだけれどとても面白い。 「夕食の給食室と雨のプール」 宗教の勧誘員らしき親子が雨の中「わたし」の新居を訪ねてくる。なにかしらん味わいがじわっとあるんだなぁ。これも面白い！	
シュガータイム	小川洋子 中公文庫	ある日を境に「わたし」は異常な食欲に取りつかれてしまう。その原因のひとつは「小さな弟」にあるんじゃないかと「わたし」は思う。このお話にはみんなちゃんと名前が付いています。友達の真由子、恋人の吉田、弟の航平、主人公薫は大学生。青春小説の味わいだけれど、そこはただの青春小説じゃないんだな。ただの青春小説には「異常な食欲」も「小さな弟」もたぶん登場してこない。林真理子さんの解説もいい。なんか歯に衣着せぬ解説で感じがいい。でも恋人の吉田さんからの手紙、わたしはけっこう好きです。こんな手紙をもらったら結局許すしかないんじゃないかと思ってしまう。	☆☆☆☆★
やさしい訴え	小川洋子 文春文庫	夫から逃れ別荘にひとり住む「わたし」は近くに住んでいる元ピアニストのチェンバロ製作者と、その女弟子と親しくなる。これは今までの本と毛色が違う。妙にアーティストチックでセレブ系。あんまり面白くなかった。こういう作品も書くわけだ。	☆☆★
凍りついた香り	小川洋子 幻冬舎	調香師であった恋人の弘之がなんの前触れもなく自殺する。涼子は死の理由を求めプラハへと旅立つ。数学コンテスト、弘之の愛称ルーキーなど、「博士の愛した数式」の前身のような雰囲気を持つ。でも結局どういうことだったのかわかりにくいかな～。とても面白いんだけど、なんか今一つみたいな中途半端感のある読後だった。やっぱりなぜ死を選んだかがわかりにくいからかな？	☆☆☆☆